共創型学習活動の可能性
－国際交流の扉を拓く－

橋本　智　　Gehrtz 三隅友子　　金成海
HASHIMOTO, Satoshi　　Gehrtz-Misumi,Tomoko　　Jin,Cheng-Hai
徳島大学国際センター

要旨：
徳島大学全学共通教育科目として 2009 年度後期に、共創型学習「国際交流の扉を拓く」を開講した。本講義は、受講生が日本人学生、留学生、社会人と多様な点と、複数教員が連携したことに特徴がある。さらに外部講師を招いたり、最終課題の発表会等を盛り込んだりして、全てにおいて初めての試みであった。まさに試行錯誤で取り組んだ結果、得られた様々な評価（関わった人が互いにそれぞれの視点からコメントを提示する広い意味での）をもとに内省し、本活動の意義を考えると共に改善への手立てを考察する。評価をいわゆる教師から学習者への成績判定のためのものにとどめず授業に関わった人の相互評価や、また最終の総括的評価だけでなく途中段階の診断的評価等を試みた点にも注目する。

キーワード：異文化理解、コミュニケーション、国際交流、気づき、評価

1. はじめに

「国際交流の扉を拓く」は全学共通教育の教養科目として 2008 年に、また共創型学習の授業として 2009 年後期に開講した。それまで開放実践センターにて社会人対象の「国際交流ボランティア入門」に替わり国際センターが新たに設けたものである。この授業では、①異文化を理解する②共に生きる③新たな地域社会を創る、の三つの基本目標をもとに留学生及び在住外国人支援のあり方を考えることをねらいとしていた。このねらいに基づいて教員 5 人がそれぞれの専門領域からの講義を行っていたが、今回新たに日本人学生と留学生を含め、また半期の期間に教員 3 名が連携して企画実施することを試みた。社会人・日本人学生・留学生そして教員がそれぞれの視点からの働きかけを通して、刺激しあいながら気づき、学びを創ることを目指す教育活動とした。このような活動を振り返る方法として、様々な評価の活動も試みている。得られた評価をもとに授業終了後の今再び振り返ることによって、共創型学習活動の「学び」とは何か、またこれからの可能性を考察する。

2.「国際交流の扉を拓く」

2.1 実施内容

内容、担当教員、実際の日程に関しては資料 1 参照のこと。

2.2 受講者

開講当初は学生 2 名（日本人 1 名、留学生 1 名）と社会人 3 名であったが、教員の呼びかけで留学生 5 名が加わり、日本人学生 1 名、留学生 6 名、社会人 3 名の計 10 名となった。

2.3 評価活動

ここでは評価を「自らの実践をさらに改善するための活動」と定義する。このような評価に関わった人と互いの関係は以下の図で表される。授業内での評価活動、方法実施時期は資料 1 の表を参照のこと。

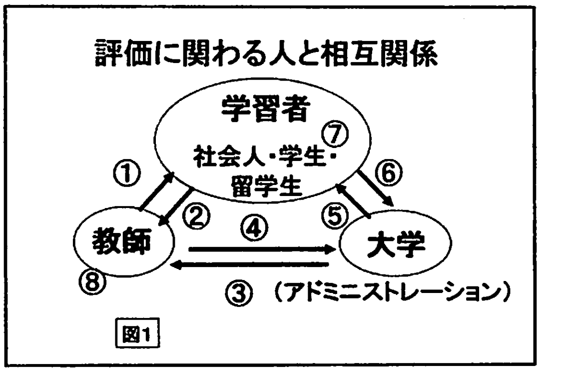


図 1 内の評価活動を番号順に簡単にふれる。教師は期間中学習者をとらえ観察し、教育活動を行う。そして授業終了後に出席及び最終発表の内容とその方法を教師二人が判定し成績を出す（図 1 の①）。また学習者から授業内に出されるコメント及びアンケートは②に相当する、複数の教師が 10 名の受講者に対してこの関係を持っていた。特に終了時には社会人 3 名への授業の対するインタビューも実施した。

またこの共創型学習活動は、まず大学側の教師への実施を促す働きかけがあり、それに応え

て実施したというのは、図の③・④にあたる。授業期間中に「週刊学びのコミュニティー（全学共通教育センター）40 号」（注１）に当授業が掲載された。さらに授業後に提出を求められたアンケート（授業の成果と社会人参画は授業をどのように変えたか）も同じく③・④の関係の中での評価活動である。

授業の最終段階で大学側からの学習者への授業改善のためのアンケート（注 2）は⑤・⑥のものである。ここで得られた結果は大学から教師へと集計結果が与えられ、④の流れになる。

講義形式よりもペアやグループによる体験学習を多くしたことから、学習者同士の評価も活発に行われた。最終発表に対しての相互にコメントを出しあう活動は⑦である。そして、複数の教師も互いが得た情報から一人ひとりの学習者への働きかけの方法や今後の学習活動の流れを相談する作業が⑧となる。

以下具体的に評価を考察する。

3． 評価から

3.1 最終評価（授業改善のためのアンケート）

授業に対して 80%の満足が得られた(20%は普通)。互いの存在が授業の充実改善に役立っているかに関しては 90%の賛同が得られたが、互いに刺激を受けたでは 50%であった、これは人数や教員の活動の設定の仕方が問われるであろう。質問項目Ⅱの自己改善に関しては全ての項目において「身に付いた」の評価を得ている。「わからない・不明」も 30%以下で体得できたことがうかがえる。「世代を超えて共に学び合うこと」の意義は 80%が確認し、学生からの評価も得られている。

3.2 授業内評価

3.2.1 ゲスト活動の評価

11 月には徳島県文化国際課国際交流室の長町氏から、徳島県の国際化の現状をお聞きした。学生からの評価は非常に良いものだった。授業の評価を見ると、国際交流が徳島県の施策として行われていることに興味を持った様子がうかがわれる。「外国人として外国人と日本人の交流(を)図ることを徳島県がしていることは嬉しかったです」、「多文化共生とか国際フレンドシップ憲章とか、国際推進事業など、たくさんの施策が出てきました。外国人の私にとってはびっくりするほどうれしかったです」（授業終了時の学生のコメント）。留学生は、「もっと地元の人たちと交流したい、もっといろんな国の人と交流したい、それにコミュニケーションの能力を高めたい」（授業終了時の学生のコメント）と思っている。このような県からの外部講師をお呼びすることによって、地域で行われている国際交流について学生に知ってもらい、それを活用するように働きかける良い機会になったと考えられる。

長町氏との質疑応答では徳島県の観光について話が及び、自然豊かな徳島県にもっと外国人を呼ぶ方策についても話し合った。終了時の学生のコメントにも、「店とかは現地人だけではなく外国人向けの新メニューを作ったり、外国人に話しかけられてもあわてて逃げたりしないようにいろいろなプログラムで広報するとすごくいいと思います」といったものもあった。

12 月には、NPO 法人ハーモニーワークキャンプの長尾夫妻からベトナムやタイへの子どもたちへの音楽を通した支援とその国際交流活動についてお話を聞き、実際の笛と歌と踊りの活動を行った。

留学生からは日本の音楽教育について知ったことまたその大切さについて、社会人からはたくさんのリコーダーが日本で捨てられていてそれが他国で役に立っていること、お二人の活動をこれからの生き方の参考にしたいという声も聞かれた。それぞれが多くの気づきを得ることができた。

3.2.2 講義評価（橋本担当）

10 月から 11 月にかけて、国際交流やコミュニケーションについて考えた。国際交流とは何か、という問いかけに、受講生は「言葉を通して(の)経済と文化と歴史の上のコミュニケーション」「文化・考え方・違う人がお互いに理解しあう(こと)」「文化・歴史・習慣などが違う人たちとの触れ合い、一つの言語で話すコミュニケーション」といった答えが返ってきた。キーワードは「コミュニケーション」であることを確認し、次にコミュニケーションとは何かを考えた。コミュニケーションとは二人以上の共同作業で、互いのメッセージの意図している意味を見出すプロセスである。そのメッセージがどのように伝えられ理解されるかは、個人の文化的な背景や経験に左右される。お互いの理解に大きな違いがあるときに、「ミス・コミュニケーション」が生じる。受講生が実際に経験したミス・コミュニケーションの話をしながら、これらの点を議論した。

授業終了時に効果的な国際交流についてコメントを書いてもらったところ、「自文化の固定観念に惑わされない柔軟な理解」「積極的に相手に好意を持って話しかける」「自らのアイ

デンティティを明確に(する)」といった回答が見られた。

ある留学生の一人は、「異文化を理解するのは子供のころからの夢」だとコメントに書いていた。このような授業を行うことによって、日本人、留学生、あるいは地域の人たちとの間で、より一層国際交流を効果的に推進していく必要があると実感した。

3.2.3 ワークショップ評価（三隅担当）

コミュニケーションの理論の講義に引き続いて11月18日・12月2日・9日は「人間関係づくり・コミュニケーション」ワークショップ三回を実施した（注3）。ここでは自由記述ではない振り返り用紙から回答を得た。振り返り項目は、①参加度②満足度③何を学んだと思うか④この内容はこれから活用できるか⑤役立つか⑥自由記述、である。これらをもとに分析する。参加度に関してはグループあるいはペアで対話をする必要があるため積極的な参加ができた。しかし満足度に関しては、初回にミス・コミュニケーションの演習（わざとコミュニケーションがうまくいかない状態）を起こししたことから、また教師がこれらの活動のメタ的な意味を伝えられなかったことからこの回は「体系的に教えてほしい」「内容がわかりづらい」というコメントがあった（まさにミス・コミュニケーションであった）。

次回からは、3人組で自らの価値観がどこから生まれたのか、また他者から自分がどのような印象を持たれているのかを見出す活動だったため、参加度及び満足度も高い評価を得た。また「今日のような活動をもっとしたいし、おもしろい」と言う声もあった。

そして3回目は、自分の感情に気づいてそれを他人に伝える活動に対して、話し手としての自分との対話（自分の感情をことばにすること）の難しさ、また聞き手として相手の何を聞くのかというさらなる難しさを改めて感じたことが確認された。全員が「役に立つ」とし、「コミュニケーションに対するイメージが変わった、誤解とか時々あるけれど重要なのは自らのそれに対しての考え方だと思います」というコメントからも、日々の生活の中で取り組んでいくことであり、自らが調整していくものであることが理解できたようである。

コミュニケーションや対人関係を理論で学ぶのではなく、体験学習方式を採用したがこの内容こそ、年齢、性、国籍、立場等の違う多くの人の中で実施して、その効果が表れるものと考える。

4．最終課題と発表会

4.1 課題（図1の①）

最終課題は、「世界の中の日本、日本の中の世界」というトピックで、受講生のプレゼンテーションとした。日本の中にある外国の文化、世界に広がった日本の文化を調べ、なぜそれぞれの国で広まったのか（あるいはうまく広がらなかったのか）を発表してもらうことにした。例として、日本に浸透したクリスマスを取り上げた。クリスチャンは人口の1％なのに、クリスマスが大々的に行われる。それは日本人が宗教に寛容だから、あるいは宗教を商業化しているから、などと考えてみるように指導した。しかし、社会人を含めたメンバーのレディネス（内容に関してまたコンピュータ使用の能力）に開きがあるため、課題を変更し自国の文化紹介も可とした。

課題のねらいは次の3つである。（1）他文化を理解するためには、自文化を理解する必要がある、（2）身近な文化を調べることによってもう一度自分の文化を確認する、（3）調べたことを他の人に効果的に伝えるための方法を考える。国際交流の場では、自分の文化を他の人に分かりやすく説明することが頻繁に強いられる。その練習の場と考えた。5分程度の内容で、写真や例を使ってわかりやすく紹介するように指示した。また、ただインターネット等で調べるだけでなく、なぜその文化が定着したのかなど、自分の意見を必ず考えて述べるように促した。

4.2 発表内容とコメント（図1の②・⑦）

各人が発表テーマを決めて作成に取りかかる際も、授業内での作成を含めて教師が内容及びスライド作成に関して個別に相談に応じた。また高度情報化センターのPC教室も利用し、パワーポイント等の使用が苦手な場合も考慮し支援をした。

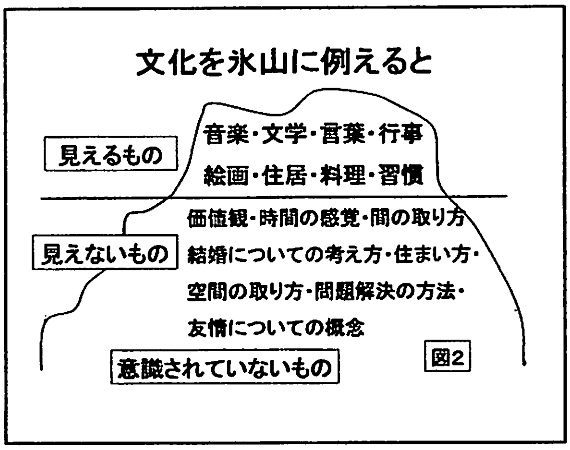
最終発表会では自分の発表だけでなく他者の発表を聞きそれにコメントするという活動を重視したので、コメントシートには、発表を聞いての「気づき？！」と自由なコメントを書く欄と発表後に一定の記述の時間を設けた。時間が許せば各発表について話し合いたかったがそれは不可能だったため記述とした。発表の録画は教師の成績判定のために使用した。2月3日の発表テーマと気づきは資料4の表を参照のこと。

4.3 発表の考察（図1の②）

各発表を聞いて、まず「気づいたこと」「気

づかされた」と思ったことを重要視した。今回の課題は、日々の生活の中でまたは互いのやり取りの中で「おやっ？」と思う自身の「気づき」から、その原因と理由を明らかにし、また写真や言葉を使って他者に説明するというものであった。9発表（二人で一つの発表もあった）のうち、自国の文化紹介（流行語、オンドル、ハングル、阿波踊り等）は図２の「見えるもの」に、自国と日本の食文化や花見の比較、宗教観といった比較紹介等は「見えないもの」に位置づけられるだろう。

課題遂行の過程で、この氷山の項目を自ら意識することによって、自分の価値観を他者とすり合わせて確認する作業が行われた。



さらに、テーマの一つに、本授業の「国際交流の扉を拓く」をヒントにした「国際交流の扉を開（ひら）くのか、それとも開いているのか？」というものがあった。日本は既に「国際交流の扉は開いている」。それは、多くの（在日朝鮮人を含めた）外国人の存在や文化・習慣が出入りしている事実があることからも明らかえある。しかしそこで意識して確実に扉を「開（ひら）く」ためには、「郷に入り、郷に従え」ではなく「郷に入り、郷を変え」なければならないという発表者自身の考えが述べられた。他の発表とは視点が違い、氷山の図の中でも「見えないもの」のまた「意識していない部分」を「気づかせる」ものであった。資料４の表の「気づき」以外「コメント」にも、「すごく新鮮な考え方である」としたものが4、「テーマが広すぎてまとまっていない」1、「郷に入っては郷を変える！の意味が分からない」1、「私はそう思うが自分の周りの人はそうでない」1と聞き手の考えを揺さぶったことが見て取れる。

コメントシートでは気づきとコメントが区別できない記述もあったが、みな各発表に関しての素直な意見感想が書かれていた。コメントには改善のためのアドバイスもあったが、全体を通して「様々なテーマについて説明し、いっぱい写真を見せて楽しかった。みんなうまくまとまっているなと思った。」という声もあった

５．社会人のインタビューから（図１の②）

これまでは社会人対象に行っていた「国際交流の扉を拓く」だが、学生の様子に比べて、アンケートからも授業の内容及び発表の方法等にあきらかに戸惑いが見られた。そこで授業の終盤にインタビューを行った。目的は、授業改善のための情報収集と社会人受講生に本授業の教師のねらいを伝えることの二つであった。社会人（いずれも男性）のうち二人は課題にそって1月27日（約30分間）に一人は2月3日（約30分間）に実施し許可を得てテープ録音した。

前者は、大学側の授業改善のためのアンケートの項目に沿って話してもらうという方法をとった。授業改善のポイントはアンケート内容に任せて、ここで出された意見は、次に集約される。

①「なぜ日本人学生が自分の意見を言わないのか、社会人が意見を言い過ぎると思われる場面もある」：他の共創型学習でも感じたことは、それは留学生が日本語力に関わらず自分の意見を持っていてそれを人に伝えようとする意欲があることである。

②「今回知り合った学生（留学生）との今後の関係はどうしたらよいのか」：授業外に一緒にイベントに参加したり、食事をしたりという交流が非常に楽しかったことから、例えば家に招いたりといった継続的な交流を望んでいた。これは、国際センターの地域サポーターへの登録を呼びかけ、今後の国際センターの活動支援をお願いした。

③「交流を通しての気づき」：違和感が起こった事例として、お礼の行為に関しての挨拶がないのはどうかというものもあった。学生はそのときに感謝を述べて完結しているにも関わらず、日本人側は「先日はお世話になりました」という挨拶を期待しているということも理解できた。これに関しては、両者の考え方の違いを明らかにし、両方の視点から見ることを提案した。また留学生からの質問の答えを考えていくうちに、自分の答えと他の一般の人たちの考えはどうなのかという視点で答えを考えることをしたということも聞かれた。

後者は、将来の仕事に活かすために本授業を受講している人であったため、アンケートを離れて自由に改善点について話してもらった。内

容に関してはおおむね満足しているが、何よりも本授業のより深くよりよいものにするには、日本人学生の受講を増やすことが挙げられた。最初の中国人教員による留学生事情からは、留学生のみならず在住外国人の問題をまさに外国人教員から聞いたことも良かった点としていた。そして非常にユニークな外部講師の国際交流に対する考え方や行動に対しては評価が高かった。他の授業に比べて、今回学生が意見を自由に言えるという件に関しては、教師の課題提示と場の設定が上手くいった結果であろうと指摘された。

6．考察（図１教師の視点から）

考察として教師の視点から授業を振り返る。学習者に対して、これまでの経験知から一様な学習者を想定し、ラベル化あるいはステレオタイプな見方をしていたことに気づく。活動の様々な場面での学習者の実際が教師の思いこみと合致していた場合とそうでない場合があった。学習者の多様性はその能力にも差があり、ペアやグループ活動には自ずと学習者同士のやりとりが活発になり意味もあった。そして教師には学習者に対して特性の配慮や個別の対応が要求された。

また教師が複数の視点で一人ひとりの学習者を看ることは、自分のステレオタイプを知ることになり、また様々な判断を揺らがせるものであった（もちろん強化を促すこともあったが）。教師の能力も違うことから対応に柔軟性が生まれたようである。そして大学との関係として、大学が授業あるいは教育のあるべき姿を提示し、それに対して教師が応えていくというような、例えばアンケートやニューズレター執筆等の働きかけは、教師と学習者に大学が入った三巴（みつどもえ）の関係を明確にした。教師が提示した「学び」が公的な目で学習者にとってどうなのかを見る機会となった。

さらに図１の関係に注目して本授業を振り返ると、知識の獲得を第一の目標とせず、自らの「価値観」に気づくことであったことを身をもって体験したように思う。特に学習者とまた教師同士の関係では、違いをさらに変化を楽しみながら授業を終えたという観がある。

7．むすびにかえて

「国際交流の扉を拓く」は敢えて「拓」の字を使っている。受講生の一人の問い「開いているのか？それとも開くのか？」はわれわれの心に関わっている。発表では「開いて」いてもそれに気づかない場合を指摘していた。そして「開ける」というのは扉の存在に気づいて自らが動くことを意味し、ここで「拓く」としたのは、目の前の相手との間の扉を勇気を持って、新しい関係を切り拓くことも必要な場合もあることを想定してである。その意味で心の扉を拓く、異文化に対する自分の心の扉に「気づく」ことをねらいとした。

共創型学習活動は関わる人が共に創る学びの場であることを確認し、今後もその担い手として取り組みたい。

注

注１　参考資料２「学びのコミュニティ 40号」。授業期間中の執筆に当たってこの授業の意義を教師は新たに確認した。

注２　3 項目を問うている。一つは授業に対して、二つ目は自己の学びに関する項目さらに授業外の学習時間に関してである。質問項目等は資料３に掲示.

注３　参考文献３をもとに筆者の一人三隅がアレンジしたものを三回に分けて実施した

【参考文献】

Gehrtz 三隅友子（1997）「日本語教育における活動の枠組みにおける一考察～日本人参加型プロジェクトワーク～」『JALT 日本語教育論集』2 号，pp.22-33

E.バークレイ他（著）安永悟（監訳）(2009)『協同学習の技法～大学教育の手引き～』ナカニシヤ出版

星野欽生『人間関係づくりトレーニング』2003，ナカニシヤ出版

2007年春期　日本語研修コース　書道体験

＜9つの国の9人がそれぞれ書きました！＞

資料1

国際交流の扉を開く　2009年後期　水曜日 15:35～16:05
担当：　金成海/三隅 Gehrtz 友子/ 橋本智

内容：　私たちのまわりの「文化」を日本人と外国人の視点からとらえ直す。受講者相互の対話を通して「文化」「交流」とは何かを考える。①国際交流とは②異文化理解とは③共に生きるとは、をテーマに「異文化コミュニケーション」「異文化理解」「留学生事情」をはじめとし、様々な視点から国際センター3名の教員が講義する。

評価：　毎回レポートの課題を出す。期末に、授業で学んだことに関するレポート課題を出す。
テストは行わない。出席、授業参加、各回のレポート、また最終レポートを基に評価する。

日程（実施）

回	日	担当	内容	評価活動
1	10/7	三隅	ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ、自己紹介	レディネス調査
2	10/14	金	徳島大学の留学生事情	
3	10/21/	橋本	国際交流	
4	10/28/	橋本・三隅	【講演】徳島県文化国際課国際交流室 長町哲司氏	コメント（自由記述）
5	11/4/	橋本	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝとは？　その要因は？	コメント（自由記述）
6	11/11	橋本	文化とは何か	コメント（自由記述）
7	11/18	三隅	人間関係づくり・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ①	アンケート
8	12/2	三隅	人間関係づくり・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ②	アンケート
9	12/9	三隅	人間関係づくり・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ③	アンケート
10	12/16	三隅・橋本	【講演】ＮＰＯﾊｰﾓﾆｰﾜｰｸｷｬﾝﾌﾟ 長尾洋子、長尾幸治氏	アンケート
11	1/13	橋本	世界の中の日本・日本の中の世界 文化紹介　ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝの準備	発表準備
12	12/22	三隅	学外にて交流会	
13	1/20	橋本	世界の中の日本・日本の中の世界 文化紹介　ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝの準備	
14	1/27	橋本・三隅	ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝの準備、発表の練習	インタビュー 総括アンケート
15	2/3	三隅	発表とコースのまとめ	発表の相互評価 インタビュー 総括アンケート

★　2月3日の発表会での互いの気づき及びコメントを集計したものを作成し、各人に配布した。

★URL:http://w3.ias.tokushima-u.ac.jp/sgp/★　　徳島大学　全学共通教育センター

週刊 学びのコミュニティー

第 40 号

平成 22 年 1 月 27 日発行

授業紹介No.5

第 5 弾は、共創型学習『国際交流の扉を拓く』です。
（水曜日7・8時限/担当:橋本　智准教授/三隅　友子教授/金成海教授）

「国際交流の扉を拓く」は、国際センターの教員が担当し、受講者相互の対話を通して「文化」「交流」とは何かを考える授業です。日本人学生、留学生、そして社会人の皆さんが一つのクラスで学び、講義、グループディスカッション、発表など様々な活動を通して、それぞれの立場からの考えを共有しています。

本年度後期は、国際センターの金、三隅、橋本教員が担当しています。初めに徳島大学の留学生事情を紹介しました。徳島大学では 29 カ国から 250 名ほどの留学生が学んでいます。一番多いのは中国、次いでマレーシア、エジプトの順です。留学生の数は、四国の大学の中で最多です。徳島にいる外国人は、留学生だけでなく、研修生、またEPA(経済連携協定)に基づくインドネシアやフィリピンからの介護士など、さまざまです。つまり、徳島にいて、国際交流ができる機会はたくさんあります。授業を通して日本人、留学生がそれぞれにそのことに気づき関心を持ってほしいと思っています。

参加型授業を心がけ、受講者が自ら考え方向性を導くことができるようにしています。教員はあくまでも「ガイド」役です。授業ではまず、「国際交流」とは何かを考えました。国際交流とは、異なる文化背景を持つ人とのコミュニケーションです。コミュニケーションは、単に情報を送ることではありません。情報をやり取りするとき、そこには送り手と受け手のフィルターがかかり、それぞれの文化・教育の背景によって情報は変化してしまいます。情報が大きく変化すると、そこには「ミス・コミュニケーション」が生まれます。これは避けるにはどうすればよいのでしょうか。「文化」とは何かを考えながら、この問題を避ける方法そしてミス・コミュニケーションから新たに何を学ぶのかについて考えました。

また、他の国の人と良い関係を持つには、それぞれの文化を良く知ることも大切です。それは、他の国の文化を知るだけでなく、自分の文化を知り、それを他の文化の人に効果的に紹介する力も求められます。受講生には、自分の国の「文化」について研究し、それを適切な方法で伝える練習も行います。

人との「交流」は、人間関係を築くことです。それは、国籍が同じ、違うに関係なく、適切な「つきあい」ができるかどうかに成功のカギがあるのでしょう。授業では、いくつかの体験型の活動を通して、「つきあう」「わかちあう」などのコンセプトを学んでいます。

上述の活動に加えて、二組のゲストスピーカーにお越しいただき、それぞれの専門と取り組みについてのお話をお聞きしました。徳島県

文化国際課国際交流室の長町さんには、徳島県の国際化に関して、特に多文化共生、交流推進事業など、県レベルの施策をご紹介いただきました。また、NPO法人ハーモニー・ワーク・キャンプの長尾さんご夫妻は、ベトナムやタイに出向き学校で子どもたちに音楽教育を行っています。受講者も指導のもとに歌、笛の演奏そして体を動かす国際交流の体験をしました。

この授業のねらいは、受講者の皆さんに自分の周りの世界の見直しのきっかけをもってもらうことです。これまでに持っていた「外国」「外国人」の概念を拡げる、新しくする、変えるといったことを試みよう！と言い換えられます。これからの社会は、様々な文化、価値観、習慣を持った人と協力していくことが要求されています。周りの変化と自分の変化を楽しみながら「国際交流」を当たり前のこととする、そんな心のあり方を目指しています。

（文責：橋本 智）

＊＊

Hatoba 企画　星空観賞会第３弾！

☆火星観望会　のお知らせ☆

1月31日に地球に近づき、見ごろになる火星を
望遠鏡で
見てみませんか？☆
☆

日時：2月2日、3日、5日（雨天、曇り中止）
19時40分～21時
＊3日とも同じプログラムです。
お好きな日、全てに参加OKです＊
場所：4号館学生支援室に集合。
総合科学部　伏見賢一先生のお話を伺ってから、5号館屋上へ移動し火星を観望します
定員：30名　どなたでもご参加いただけます
（事前に学生支援室までお申し込みください）☆

Hatoba　「恋のうた学習会」

第6回は、
2月12日（金）
15:00～16:30頃
学生支援室にて行います。

第1回目に堤先生をお迎えして以来、着実に回を重ね、ぐんぐん成長中の学習会です。
どうぞお気軽にご参加ください。

大変寒いですので、暖かい服装でお越しください!!

～編集後記～

『週刊　学びのコミュニティー』の発刊から約1年、第40号を数えるまでになりました。情報を提供するだけでなく、この取り組みが円滑に進んでいくために、そして活発な学び合いのために一役を担うことができたら･･･そんな思いで毎週発行してきました。

1年間ニュースの作成を通して、この取り組みを見つめてきましたが、ここあそこに様々なプロジェクトが生まれ、その活動が活発であった1年でした。それはこの紙面での紹介が追いつかないほどの勢いでした。間もなく後期の授業が終了します。今年度の反省をしっかり咀嚼しつつ、この勢いを来年度へと繋げていきたいと思います。（境）

資料３

授業改善のためのアンケート（社会人参加の共創型学習・教養科目）

Ⅰ 質問項目

1. 授業内容のレベル
（⑤大変難し過ぎる ③普通 ①大変易し過ぎる）
2. あなたは熱意や意欲を持ってこの授業に臨んだ
（⑤大いにそう思う ③普通 ①全くそう思わない）
3. 大学にふさわしい授業であった
4. 学ぶことの楽しさを感じさせる授業であった
5. 社会人（学生）の参加は授業の充実や改善に役立っている
6. 社会人（学生）から刺激を受けた
7. このような形式の授業を増やすと良い
8. あなたは、この授業に満足しましたか？

Ⅱ 質問項目

（⑤大いに身に付いた ④身に付いた ③不明 ②身に付かない ①全く身に付かない）

1. コミュニケーション力が向上した
2. 自分とは異なる視点の存在に気がついた
3. 思考力が身に付いた
4. 大学で学ぶことの意義が理解できた
5. 対話による学びについての理解ができた
6. 新しい発想で物事を見ることができるようになった
7. 授業に関連した課題をさらに深めたいと思うようになった
8. 生涯学習の意義が理解できた
9. 教養に対する理解を深めることができた
10. 世代を超えて共に学び合うことの意義が理解できた

Ⅲ 質問項目

この授業に関して、予習復習にかけた時間（1 週間当たり）

資料4

国際交流の扉を拓く

最終発表会 コメント

2010年2月3日(水)

順	テーマ	気づき ?!
1	流行語について	・OZRの説明がおもしろかった ・日本と中国の流行語を加えた ・若い人のことば、本では接する機会があまりないものなので ・中国語も流行語がある(絵文字) ・若者文化は世界共通
2	日本の宗教について	・日本の年中行事はどんな宗教にもあることはびっくりしました ・ご都合主義、テーマはおもしろい ・日本人の宗教心はやはりふくざつ ・新聞からの調査 日本人は無宗教ではない ・ご都合主義
3	日本と中国のお正月～食文化について～	・材料に意味 ・中国の正月料理 ・日本の方は水餃子が好きじゃない ・神様に供えるイメージ。強い現実的なイメージ ・日本は明治5年以前、旧暦で祝っていたことが知らなかったです
4	中国に広まった花見	・武漢大学の桜 ・中国の花見は韓国と似ています ・武鑑大学の桜にも反日があるのだな、関係文化にも注意しなければ ・文化の成り立ち、日本特有の花見
5	国際交流の扉を開くのか、それとも開いているのか？	・郷に入り、郷を変える、よそ者 ・視点が特別なので面白かったです ・ごうに入ってはごうを変える(？) ・国際交流の心の扉をひらいていく ・郷に入って郷に従え！→郷に入り郷を変える
6	ハングル	・どうして韓国人は漢字の代わりにハングルを使うのかちょっと気になる ・CiaCia族のことがぜんぜん知らなかった ・ChiChi(？) ・ハングル ・資料をたくさん調べた ・ハングルが1443年にできたこと
7	中国の食文化について	・写真いっぱいついた ・日本と中国の比較 ・中国の食べ物の特徴 ・写真が本当に私を誘惑した ・日本人の食文化 ・中華料理にもいろいろな種類があるのだなと思った
8	オンドルについて	・昔ながらのオンドルは始めて聞きました ・オンドルとは ・日本の家がすきまだらけであることが初耳でした ・日本にはなぜオンドルがないのか？韓国では一般化していること ・オンドルの原理を詳しく説明してくれた
9	阿波踊り	・「阿波の連」は連の名前ですか、おとなしくなくて元気な踊り ・阿波踊りにも各種各様な連の存在に気づく ・若い人たちも楽しめていること ・パワー全開 ・なるほど徳島大学も阿波舞の連を持っています